

(十七) 自己点検・評価等

1. 大学・学部の自己点検・評価

(1) 自己点検・評価

a. 自己点検・評価を恒常的に行うための制度システムの内容とその活動上の有効性

現状の説明

本学は、1991年の大学設置基準改正によって点検・評価が義務付けられたことを受けて、1992年11月に「西南学院大学点検評価規程」を制定し、翌年度から点検・評価の取り組みを開始した。本学の点検・評価は、「全学点検評価委員会」が、各学部・部署のそれぞれの点検評価委員会が行った点検・評価の内容を検討して総括する一方、「基本問題点検評価委員会」が大学の理念・組織・管理運営を点検・評価するという二つの柱を中心に実行してきた。

本学は、その経験を基礎にした点検評価報告書を作成し、その報告書提出により大学基準協会の「加盟判定審査」を経て1993年協会の「正会員（維持会員）」となっている。その後、更に点検・評価を制度システムとして恒常化し、範囲の拡大、質の向上を目指して努力し、1996年、1999年には、総括報告書「西南学院大学 現状と課題」を出版し公表してきた。また、2000年には、学長諮問機関である「点検評価専門研究会」の答申が報告され、本学点検・評価の基本的方針が提示され、本年2002年は、その後の大学をめぐる状況の変化を更に認識・分析し、点検・評価にもそれを踏まえた新たな視点を導入し、理念・理想だけではなく、現状に適応した点検・評価を進める段階に入っていると言えよう。この度、大学基準協会の相互評価の判定審査を受けることは、本学のこれまでの自己点検・評価を総括するためにもよい機会であり、有意義なことであると自覚している。

点検・評価 長所と問題点

本学の公表した「西南学院大学 現状と課題」(1996年及び1999年)には、本学の建学の理念と精神から始まって、その歴史及び大学の学部・各部署の組織と現状が丹念に紹介され、それは本学の特質やその組織を知るためには重要な役割を果たしていることは容易に理解できるし、その有効性は評価される。しかし、率直に言って、この報告書を読み進んでいくと、本学が抱える現況から課題の分析、及びそれに対する積極的な対策への提言にはやや乏しいものがあり、結果の報告に終わってしまっている傾向にある。それは、全学点検評価委員会及び基本問題点検評価委員会が、その機能を十分果たし得ていないからである。それが自己点検・評価の甘さにも及んでいきらなければならないことを反省せざるを得ない。あれから3年経た今日、日本の大学全体が遭遇している問題と関連させながら、本学が持つ特殊な課題を綿密に洗い出し、批判的検討を加え、それに対する積極的対策を考えていく必要がある。

将来の改善・改革に向けての方策

これから点検・評価の改善・改革に向けての方策を考えるに、大切なのは、自己点検・評価はあくまで大学の存在意義と、教授方法やカリキュラムの改善による学生の勉学意欲・学力向上を図り、同時に研究活動を活発化させ、その社会的評価を得るための手段であって、それ自体が目的になってはいけないということである。ややもするとこれまでは、外圧や評判を気にするあまり、点検・評価が一人歩きし、悪い場合は「点検・評価のために」といった本末転倒が起こりかねない状態に陥る危険性さえあった。そこところは自覚しておきたいことである。点検・評価はあくまで改善のための手段である。その辺の事情を自覚し反省する立場から、本学は自己点検・評価を単なる結果の記述だけでなく、更にそれを積極的な応用へと転換させ、その本来の目的を達成すべく努力する必要性を痛感しているところである。また、自己点検・評価が時間をかけ、労力を費やした割には成果が上がらないのは、自己点検・評価システム自体にも問題があり「何のための自己点検・評価か」というその根本問題を再検討することも必要だからである。

う

(2)自己点検 評価と改善・改革システムの連結

a. 自己点検 評価の結果を基礎に、将来の発展に向けた改善・改革を行うための制度システムの内容とその活動上の有効性

現状の説明

本学は大学基準協会の指導により、最初は大学本部、次に各学部・学科、大学院、続いて各部署、付随する各施設やセンターにそれぞれ自己点検評価委員会を設置し、そこで責任を持って作成した自己点検・評価報告書についてそれを全学点検評価委員がその形式及び内容を、各部署の委員と討議しながら検討修正し、それらを総括する形で文書化し公表してきている。まずは、そのような標準システムから出発しなければならなかったからである。しかし、その作業を毎年繰り返していると、委員の交代にもかかわらず、あまり変化のない固定した点検・評価になる傾向が顕現しはじめてきているというのが、本学の点検・評価の現状である。それゆえ、その点をよく自覚し、それが単なる文書作成に終わることなく、それを将来の改善に向けての実践的道標にすべく、その方向を見誤らないようにすべきであろう。

点検・評価 長所と問題点

各大学から毎年送られてくる「大学の自己点検 評価」の冊子は、その膨大なページ数にもかかわらず、ある種のデータに変更はあっても、そこには実施後、実際にどのような変化があり、効果があったかという実態はあまり読み取れない。それでは実質的に効果ある点検・評価報告書とは言えない。本学もこれまでそのような傾向にあったことは免れられないが、点検・評価に関する理念や意義の再検討、実施方法の改善へ向けての反省に立って、これまでやってきた自己点検・評価の基礎的部分の分析とその効果の実質性を踏まえて、今何が問題で何が改善されるべきかという視点から、そこに重点をおいた新たな点検・評価システム及び評価方法を採用すべく検討しているところである。

将来の改善・改革に向けての方策

これからの点検・評価の改善・改革システムにおいて重要なのは、考案されたそのシステムをいかに効果的に実行するかである。うまくいかないシステムについては、どこがどのように問題だったのかを具体的に分析し、どこを改善すれば効果的になるかを確認する作業が要請される。また、それに携わった関係者は、採択した自己点検・評価システムが実際どのように相互に関係しながら機能し得るのかを、その内容及び結果について、公表を前提にお互いに話し合う必要がある。つまり、これまでの自己点検・評価はいつも受け身であり、単なる文書作成に終わってしまっていたのである。実際、その検討結果を単にそのまま叙述し、文章化しただけでは、何のための点検・評価かわからなくなってしまう。そこをどう打開したらいいかを考えてみると、基本的にこれまでの自己点検・評価が外に向かって開かれておらず、消極的な守り姿勢だったところに問題があることが判明してくる。後述するように、それは、内部においては他の教授や学生からの評価、また外部の人間による第三者の評価の積極的導入が必至になるということである。自己点検・評価は決して自己満足や馴れ合いの相互承認だけに終わってはいけないのである。

(3)自己点検 評価に対する学外者による検証

a. 自己点検 評価結果の客観性・妥当性を確保するための措置の適切性

現状の説明

自己点検・評価の客観性・妥当性を考えるためには、やはり学外の識者による評価が必須の条件である。本学は、自己点検・評価を「西南学院大学 現状と課題」として3年ごとに作成し公表しているが、積極的に学外者による第三者の検査や評価をまだ受けていない。これは流動し不透明な現代社会における大学改革に対して採り得る態度として本学の長所でもあるのだが、何事に関しても「緊急度」と「重要

度のバランスを考えながらことに対処してきた本学は、この件に関しても慎重に模索し、効果ある方法を採用しようと努力を積み重ねているところである。それに学外者の検査・評価を受けた大学からの報告書等から読み取る限り、どの大学も第三者評価に関してはまだ模索している段階であり、どんな方法が外部評価として適当であり、効果があるかは未知の部分が多い。時間と労力をかけた割には予想していたような効果が上がらなかったといった報告もある。その辺のところを慎重に検討し、本学も近い将来、本学に適切で独自の方法を考案し実践すべく、その実施時期や方法に関しても具体的な研究・検討を重ね、早急に効果ある第三者評価に取り掛かろうとしている段階である。

点検・評価 長所と問題点

本学はまだ、学外者による点検・評価についての検査は積極的には実施していないので、現時点で外部評価の検査に関する判断、また長所や問題点を指摘することはできない。

将来の改善・改革へ向けての方策

本学は近い将来、学外者の検査を受けるにあたり綿密な調査と実行計画を考えている。今回の大学基準協会の相互評価を受けるのもその一つの大きなステップである。学外者による点検・評価・検査に関しては、次のようなものを模索・検討している段階である。

A)文書による外部検査・評価

本学が作成した自己点検・評価の文書を学外者に読んでいただき、大学全体の評価を依頼すると同時に、各学部の教員組織、カリキュラム、授業シラバス、学生数と教員の数のバランス等々に関して意見・評価をいただく方法。

B)授業参観による見学・評価

本学のある学部のある教授の授業を、本学の教授のほか、あらかじめ依頼しておいた他大学の専門を同じくする教授及び大学外の専門家に参観してもらい、その後、その授業の内容、授業の進め方等について、具体的に批判・討論し評価してもらう方法。その報告書を学部内で閲覧し、反省を含めその評価の適切性を再検討し、その後の授業改善のための資料とする方法。

C)討論会(シンポジウム)による検討・評価

本学のある学部の複数の授業を他大学の教授、学外の専門識者に参観していただき、その授業担当教授と参観していただいた他大学の教授及び識者によるシンポジウム形式で、授業内容・授業方法等について検討する方法。フロアーには学生や父母を同席させても効果が上がるかもしれない。その検討を踏まえて教授も学生もその授業の改善の助けとする方法。

D)国際的水準との比較・検討

まず、大学に在籍する外国人教師の研究・教歴経験をもっと積極的に活用する体制を作り、更に大学を訪れる外国の教授に実際に授業を参観していただき、意見・感想を尋ね、国際的視野から問題点を浮上させる方法。

いずれにしても、学外者による検査・評価は一方通行では効果が半減するので、内部者と外部者の率直な討論が必須の条件になろう。しかし、また外部評価を実施するにあたっては、具体的に誰が授業をするのか、どの大学に評価を依頼するか、どのような学外識者を選ぶか、その報酬はどうするか等々、様々な難しい問題を抱えることになるが、第三者としての学外者の検査・評価がない限り、大学の自己点検・評価が完成しないことは自明のことなので、その実施に向かって本学もやれるところから始めていかなければならない。それは緊急を要する課題である。全学部統一した方法で実行するのが困難な場合には、学部単位で始めるのもいいかもしれないし、その結果報告を義務付ければ教授個人の意見や方法を受け入れるのも一つのやり方かもしれない。いずれにしても、外部からの総合評価と学生による授業評価は、

本学の自己点検・評価にとってすぐ手をつけなければならない最重要な課題であることは間違いがない。本学も、国内・国外のFDIに関する資料を集め、夏期教員懇談協議会等で集中的に討論し、その実施に向かって具体的検討に入っているところである。

(4) 評価結果の公表

a. 自己点検・評価結果の学内外への発信状況とその適切性

現状の説明

前述したように、本学は自己点検・評価報告書にあたる『西南学院大学 現状と課題』(1966、1999)を発行し、外部としては、関係官公庁、私立大学連盟加盟校、キリスト教学校教育同盟加盟校、及び1993-1998年までに自己点検・評価報告書を送っていただいた各大学に送付している。内部においては、全学部の教員全員、各部署、及び常任理事に配布している。

点検・評価 長所と問題点

本学も、大学基準協会からの指導もあり、それに沿う形で点検・評価の内容・方法・形式も一応整い軌道に乗ってきたと、積極的に評価してよいであろう。しかし、それを活用して実践の場に移す体制はまだ不十分である。公表という点から言っても、本学は、点検・評価報告書を関係者に送付するだけにとどまっておき、また外部評価を導入するに至っていないため、それを考慮する形での報告書作成の視点や方策は十分整っているとは言えない。外部評価を受け入れる体制を早急に確立し、その旨を踏まえた報告書の公表でなければならない、と考えている。

将来の改善・改革に向けての方策

各大学から送られてくる自己点検・評価報告書は、正直のところあまり読まれているとは言えない。学部長、点検評価委員に選ばれた教授、各部署の長及びその点検評価委員が自分に関係するところを読むぐらいである。点検・評価システム制度の在り方自体に問題が無きにしもあらずとはいえ、これだけ時間と労力をかけて作ったのであるから、大学内部での各学部、各部署における改善のための討論の資料にした。更には各大学が、大学間の相互評価の材料として活用すべきである。点検・評価は単なる文書作成で終わることなく、大学の改善に向かってもっと積極的な利用方法を打ち出す必要がある。本学は、点検・評価報告書を批判的に読み、その結果を実践的に活用することを目指していくことを確認して作業を行っている。作成した文書を公表するとは、そのような意味を同時に持つものと理解している。

b. 外部評価結果の学内外への発信状況とその適切性

現状の説明 点検・評価 長所と問題点 将来の改善・改革に向けての方策

本学は、内部においては『西南学院大学 現状と課題』として自己点検・評価を含めた報告を実施しているが、学外者による検査・評価はまだ実施していないので、その発信状況やその適切性について判断することは今のところまだできないが、今回受ける大学基準協会の相互評価の結果を学内外に公表し発信することから、学外への発信を開始したいと考えている。また、外部評価に関しては上記3)のような要領で実施すべく検討中である。